

三木清の文学論

小林, 茂夫 / KOBAYASHI, Shigeo

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

1960-12-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019012>

三木清の文学論

小林茂夫

はじめに

『三木清著作集』（岩波書店）十六巻のうち、第十巻第十三巻には文学論稿や文学論が収録されている。生涯の業績のなかでもかなりの分量とすべきである。私は特に昭和初頭にかかれた第十巻の諸論稿に注目したいと思う。その巻には、①芸術的価値と政治的価値（昭和四年『プロレタリア芸術教程』第二集）②啓蒙文学論（昭和五年十月『改造』）③文学形態論（不詳）④現代階級闘争の文学（昭和八年、岩波講座『日本文学』発禁。内容項目は、一、階級闘争文学の一般的规定 二、プロレタリア文学の可能性と必然 三、日本プロレタリア文学運動の発端 四、運動の統一と分裂 五、運動の新たな展開 五、文学理論と創作活動 六、芸術的価値と政治的価値 七、プロレタリア・リアリズムの問題 八、若干の反省）⑤今日の倫理の問題と文学（昭和八年四月『文学』）⑥ネオヒューマニズムの問題と文学（昭和八年十月『文芸』改造社版）⑦文学的世代の問題（昭和八年十二月『文学』）⑧文学史方法論（昭和九年七月、岩波講座『世界文学』）⑨文芸学的人間学（不詳）の九編となつて

いる。これに未収録の「新興美学に対する懷疑」（昭和五年四月『文芸春秋』）を加えると約十篇を代表的なものとみることができる。これらのうち①②④について紹介しながら三木清の文学精神にふれたいと思う。

一、文学性をめぐって

三木清と文学をめぐって多くの人がさまざまな意見をのべている。青野季吉は『パスカルにおける人間の研究』を読んだときに——いま読んだら一種のペダンチックなものを感ずるけれど、大正十五年に出た時は、アントロポロジーというところではこういうことが言えるかっていう、評論に対する新しい形式を見出したような感じがしたね」と当時を回想しながら、三木の文学にもたらした新鮮な批評形式に注目を与えている。青野の発言に対して唐木順三は次のようにかなり微妙な対立をみせている。

唐木 三木清の傑作は「人生論ノート」ぐらいだね。

青野 「文学史の方法」なんかいいと思いますよ。

唐木 あれはちょっと勉強すれば書けるようなもので、そう恐ろ

しいと思わない。

青野 ぼくらのかなわないものがあるね。

唐木 生きていたらどうなるかというところはあるね。

青野 ただあの人は、素質だけど、時どき相当重い発言をするんだよ。それだけ人間が特色があるんですよ。

右の対話は『現代日本文学全集』・「月報85」（筑摩書房）の座談会「近代日本文学における評論の位置」（青野、唐木、臼井吉見、小田切秀雄）から引用したものだ。その対話の中でもうかがえるように、唐木の発言は三木の文学活動そのものに対して青野ほどには新鮮さを感じていない。それはすでに三木の獄死直後に発表した『三木清』（筑摩書房、昭和二十一年）の中で「三木さんはしきりに文学論を書いているが、それは哲学的に具象化しえない人間像を文学の中に求めようとした試みであつたろう」と推論しているように「孤独」の産物とみる立場に立っているからである。以上は代表的な今日の見解であろう。

一体、三木清の本質というのはどのように考えられて来ているのだろうか。永田広志は「三木氏はイデオロギーの形式における主體的要件としてのロゴスとパトスなるものの意義と差別を強調したが『生哲学』はもともと『パトス』的なものであるから、三木哲学が多分に文学的であり（この文学性は文章のスタイルにも現われている）……実に彼の本質的傾向の然らしむるところであつたのである」（『西思想家三木戸坂衷失の文化史的意義、昭和二十一年「思潮」創刊号』）といっている。つまり三木哲学の特色として文学性を本質的傾向とみているのである。一般的にみて文学に与えた三木の影響というものは、おそらく永田の指摘しているような文学性に対する

魅力であつたのであろう。豊島与志雄は「三木のうちには常に詩人がいた」として、「生前の三木の仕事としては『構想力の論理』を頂点にあるもの」（三一書房版『回想の三木清』）とあげているのは、そういう魅力を求めた代表的な告白であらう。

だが、それらの見解は哲学論文集を対象として受けとられた素質としての文学性についてのさまざまな意見である。それでは、そのような豊かな文学性がどのように文学論として展開されたかという文学論の独自性についてみなければならぬ。三木はその哲学においてまれにみる文学性を発揮したが、他面において多くの文学論、社会批評、文化批評等々の多彩な活動を行い、それらのうちでもっとも独自性を発揮したのが文学論である。そしてその文学論の当時の文学に与えた影響は強力なものであつた。例えば「マルクス主義退潮後における知識層の去就にたいしてつよい影響を与え」また「彼の影響をはなれて不安の文学ないしヒューマニズム文学について考えることは全く不可能なことである」（飯野哲二等編『日本文学辞典』学燈社、昭和二十八年）といわれる程、昭和十年代の我が国の文学の去就に迷える人びとにとって主導的な影響力を認められたのである。このような影響力は、哲学における影響力と本質的に変らないはずである。船山信一は三木哲学の本質を次のようにいっている。「三木は哲学を講壇から社会へ引き出し、それに政治的批判性を与え、ついにその犠牲となつた」（『世界大百科辞典』）と。

問題をさきにもどしていくと、三木における文学性をどのようにみるかという点の微妙な青野と唐木との対立というのも、それは歴史的意義の積極的観点に立つかあるいは歴史的意義に対して消極的観点に立つかの対立でもある。現実に残された三木の文

学論を読みすすめてみると、その殆んどがプロレタリア文学論によって占められているのに驚くのである。三木の影響力の強力さについていうならば哲学においても、また文学論、文学史論においても当時のプロレタリア文学運動からの影響なしには考えられぬ程密接な関係にあることがわかる。しかしながら三木のこのような積極面に人びとはふれたくはないのであろうか、殆んどの三木清研究にとりあげられていないのである。まことに不思議な現象というほかない。

二、美意識の变革

三木清の独自の文学論に注目したものとして『日本哲学思想全書』（平凡社）の第十三巻「芸術文学論一般篇」（昭和三十一年）に本居宣長以下年代順に啄木「時代閉塞の現状」と共に三木の「啓蒙文学論」が再録されている。この再録が書誌的にみて戦後始めて認められたことになるだろう。

「啓蒙文学論」は三木のプロレタリア文学論である。三枝博音・宮川晟の解題は、その内容を次のように簡約している。

さて、プロレタリア文学を三木は「啓蒙文学」と規定している。それはプロレタリア文学がただ単に啓蒙的であるという単純な理由によって規定したのではない。彼によれば、プロレタリア文学の運動は、何よりもヨーロッパにおける十七、八世紀の啓蒙運動に対比される性質をもっている。それは「旧き社会の变革、新しき社会の建設の過程に於ける最も一般的な現象のひとつ」であって、「新興階級は従来のイデオロギーに対して、自己の階級の要求に応ずるイデオロギーを急速に生産し、普及する必要に迫られる」そうしたときにおこる啓蒙運動の文学におけるあらわれ

だというのである。しかも、啓蒙運動はいずれの場合においてもまず第一に政治性をもち、つぎに大衆性をもつことをその特色としているが、プロレタリア文学も大衆の政治意識を自然生長的なそれから目的意識的なそれにたかめ、大衆に階級的な連帶的な意識をもたせ、階級として組織することを目標としている。そうした意味で、プロレタリア文学は「啓蒙文学」である。そう彼はみているのである。

三木はこのような規定から日本におけるプロレタリア文学運動を「世界史的な事実」として注目し、さらに「新しき芸術」の出現に対して積極的に評価するように訴えている。三木のいう「新しき芸術」とは、政治と結合した芸術性を意味している。「しかるに人々は、恰も非難するが如き調子をもって、それらのものは政治的芸術に過ぎないという。……いかにも過去の偉大な芸術の或るものは政治的芸術ではなかった。しかしそれらとても『純粹な』芸術ではなく、或いは哲学的芸術であり、或いは宗教的、或いは科学的芸術であった。……今の社会に於て、若し政治的芸術のための条件しか存しないとすれば、芸術家は他の種類の芸術を求むべきでなく、却って『優秀なる』政治的芸術の制作に向ってこそ努力すべきである。政治が芸術を指導するということは、政治が芸術に対して一般に『芸術性』を放棄せよと命ずることではなく、却ってまさに政治と結合し得るが如き『新しき』芸術性を創造せよと命ずることである」と主張している。

ここで明らかなことは、三木のモチーフのなかに、当時のプロレタリア文学に対する否定的な見解に対する闘いの姿勢、そして政治との結合を拒否する芸術至上主義的な古い美意識に対する変革への

理論的展開であつたと読みとることが出来るだろう。このような意味において、「啓蒙文学論」に至る最初の文学論文「芸術的価値と政治的価値」と「新興美学に対する懷疑」をみると、三木の古い美意識への批判がいかに大胆なものであつたかということがよく示されている。

有名な「芸術的価値と政治的価値」の対立論争における三木の発言は、『現代日本文学論争史』（平野謙・小田切秀雄・山本健吉編集、未来社、昭和三十二年）にも収録されていないが、しかし美学的発言としてみると重要な位置をもっている。おそらく美意識の变革を訴えた点で異色のものではあろう。

三木の論争に対する態度は、先づ問題の方法に対する批判から始まる。即ち「この問題を追求するにあたって私はあらかじめいっておこう。現在わが国の文学理論家たちが問題をかかえる仕方では提出するとき、それは全く古い問題を古い仕方では提出しているに過ぎない」として、「それは一般的にいえば、価値のアンチノミの問題であり」「問題の立て方そのもののうちに或る誤り、少くとも或る歪みがあるのではないか、ということを含めなければならぬ」としている。

周知のように平林初之輔によって提出された問題というのはこうであつた。「ダンテの作品にはプロレタリア的イデオロギーが含まれていない。シンクレアの作品はプロレタリア的イデオロギーに貫かれている。だから、ダンテの作品は、芸術的にシンクレアの作品よりも劣っている」と「マルクス主義者」はいうが、それは芸術論でなく政策論ではないか、という問題のたて方であつた。この問題のたて方に対して三木は、ダンテの神曲が政治的価値をもたなかつ

たという見解にたっているのは誤りであると指摘する。なぜならブルジョアジーにとってダンテは政治的価値をもっていたが、現在はその価値が問われないのは、芸術作品の価値が歴史的転化の原則によって失われているからにほかならぬ。プロレタリアートにとっての新しい歴史的意味賦与は各々の歴史的時代に於て異つてなされる」と反論している。この反論は、後の三木の「歴史哲学」の特色をも端的に示して興味深いものがある。

このように三木はダンテとシンクレアの作品との歴史的評価を無視して、並列的に優劣を論ずるという方法に対してそれは「論理の遊戲にすぎない」と批判し、さらに芸術作品から政治的イデオロギーを拒絶しようとする美意識の古さをするどく指摘する。「イデオロギーは作品の雄大さ、崇高さ、深遠さなどの源となつて、その芸術的価値の高昇のために貢献している」、従つて「芸術作品におけるイデオロギーの意識的必要こそ全生命にかかわる問題」ではないかとしている。平林らに対して反論した当時の哲学者の中で、これほど大胆に芸術作品の中にプロレタリア・イデオロギーの重要性を認めたひとはいなかった。

「新興美学に対する懷疑」は、谷川徹三「マルクス主義文学理論の批判」（昭和四年四月『思想』）にみられた考え方の一つである、イデオロギーは芸術的価値の自律性を束縛する、という立場からの懷疑論に対して批判を展開したものである。当時の谷川の考え方には、芸術的批評と社会的批評とは別な事柄であるとする定式があつた。三木はその定式を打破せんと試みたのである。しかしながら、平林・谷川の見解を支持する立場からみた場合、三木の批判がカンにさわつたのは当然であらう。小林秀雄は三木の態度を「学者

的横柄」ときめつけ、文芸時評「アシルと亀の子」でさっそく三木の谷川批判をとりあげ、次のようにまとめて毒舌をふるっている。

氏（三木）は言う、第一に作家も批評家も芸術的感情そのものを社会的に批評しなければならぬ。次に、芸術批評は単なる印象批評に終る恐れがある。印象批評が技術批評に進み、印象された心理の技術的基礎まで達した批評家は、さらにその社会的基礎にまで突き入る可きだ。第三には、芸術的批評の独自性を主張する思想の根柢には、多かれ少なかれ、意識的にせよ無意識的にせよ、『芸術の為の芸術』という思想がある。この思想が既に一定の社会的根柢をもつ以上、芸術的批評の立場はまた社会的に批評されねばならぬ、と。

一体こんな調子で社会社会と言われて世の作家や批評家に何が面白い。社会とはあなたの眼前に生きた現実だ。あなたの頭の中でひよつとこ踊をする概念ではない筈だ。現実の何処を切っても社会という同じ顔があるという態の社会なるものは、飴の中から飛んで出る金太さんのように無益である。（昭和五年五月『文芸春秋』）

この毒舌を痛快とし、そして三木に対する徹底せる批判だと受けとる人もいる。だが、当時における美意識の代表者とみられていた批評家の美意識というものが、いかに社会（生松敬三「昭和における『モダニズム』思潮」近代日本思想史第三巻、青木書店）という言葉にさえおびえて必死に排除せざるをえなかったかの痛快な証明書として読みとることもできるだろう。そして同時にそのことは、三木の批判が対象に対していかに強力であったかを裏書していると私は考える。

三、トロツキズム批判

三木の多彩な著作活動のうちで「現代階級闘争の文学」は唯一の発禁論稿である。その頃（昭和七・八年）の三木の活動の特色は、昭和五年に共産党シンパとして検挙されて以来、政法大学教授などの職からしりぞき、もっぱら「歴史哲学」（昭和七年四月、岩波書店）の執筆にとり組んで来た。それ以後ジャーナリズムを舞台に多彩な新しい活動が始まった。そのような新しい活動への出発点であり、またそれまでの文学論の一つのまとめでもあったというところにある。もう一つの特徴はいうまでもなく発禁（昭和八年一月）の一カ月後には小林多喜二が殺され、右翼による暗殺事件の続発、五月には滝川事件が起るといふプロレタリア運動に対して徹底的な弾圧が加えられ、同時に自由主義者へも範囲がひろげられていくといった戦争体制への急激な転換時代を背景にしているという点である。そして第三に哲学者によってかかれた唯一のプロレタリア文学史論であることである。

当時のプロレタリア文学・文化運動は戦争体制への新しい抵抗運動を目指していたが、しかし強力な弾圧は、さまざまな生活的精神的動揺を生じ、それに対する克服の問題が深刻な課題となっていた。たとえばさまざまな動揺のうち敗北主義と同時にプロレタリア文学・文化を自己内部において否定する極左理論の混乱がそれである。文壇はもちろんのことプロレタリア文学運動の一部にもそうした風潮はかなり根強くひろがっていったのである。歴史的にふるくからの否定論としてトロツキイの『文学と革命』（注）があった。三木はプロレタリア文学に関する一般的規定をのべたあと、「二、プロ

レタリア文学の可能と必然」という項目を設けてトロツキズム批判にあてた。このトロツキズム批判は、一般文学史の通例を破った三木独自のものであり、トロツキイの理論的誤謬をもっともするべく暴露したもののうちでもすぐれた論理をもっている。三木はまず次のようにまとめる。

トロツキイは「いづれの支配階級も自己自身の文化、従って自己自身の芸術を創造する」。だが、奴隷社会からブルジョワ社会に至る文化は、いづれも歴史的に永い期間を経て発達している、とトロツキイはいふ。ルネッサンス以来のブルジョア文化は五世紀も経てゐるではないか。それに対してプロレタリアートにとって、社会主義への過渡期においてプロレタリア独裁の支配期間は短期間である。

したがってこの短い期間に新しい文化を創造できない。またプロレタリア自身にとつてもそのエネルギーは、権力獲得や、その維持、強化、利用にむけられるのみならず、革命は「文化的労作」を「狭い限界内に押し込める」。そして反対に「新しい社会秩序が政治的及び革命的震動に対してより完全に保証」された後にはプロレタリアートは「階級的特性」から解放され、「人類」的になり、文化建設は可能となるであろう。したがってプロレタリア文化は存在しないだろう。「なぜならプロレタリアの独裁は過渡的なものであるから」というのがトロツキイの骨子である。

三木はこのような極左的否定論に対して「彼の見解は一見甚だ明快である。然しそれはそれだけ機械的である」と前提しながら、次のように指摘する。「先づ、トロツキイはブルジョア文化から社会主義文化へと一直線に、機械的に進行するもののように考える」が、それは現実の発展を弁証法的にとらえていないこと、「次に、トロ

ツキイは政治と文化とを機械的に切り離して、政治闘争に対する文化闘争の意義を十分に認識していない」こと。「トロツキイがその書の中で、今我々に必要なのはプロレタリア芸術でなくて革命芸術であるといったとき、彼はルナチャルスキーも指摘したように自己矛盾に陥っている。というのは、必要なのは如何なる革命芸術であるか。全人類的、超階級的のそれであろうか。否、それはプロレタリア芸術としてのそれではないならぬ筈である」と反論する。

「更に、トロツキイは種々なる国におけるプロレタリアートの発達の不均等を看過し、そこからして共產主義文化社会への到達がジグザクな道を通じて成就されるということを見做している」ということを指摘している。

「更にまた、その理論構成において社会の発展のテンポを誇張した」と指摘する。トロツキイは「即ち彼は自己の構成の中でプロレタリア政権の死滅の速度を誇張したのであって、彼のプロレタリア文化否定論の誤謬はかかる間違つた前提の上に立っているのである。彼はプロレタリア文化の形成と蓄積とが、その全人類的文化への解消の過程よりも急速に行われるとは考えないで、その解消がその形成と蓄積との過程よりも急速に行われていると信じた」とはげしくつめよっている。

とくにトロツキイの理論的誇張に対する批判に、するどい論理追求と同時に三木のトロツキズムに対するいかりを含んでいる。

トロツキイの否定に対して、それではプロレタリア文化及びプロレタリア芸術の可能と現実をどのように三木はとらえていたであろうか。三木はソヴェト同盟を例に「就中次の如きものが注目されねばならぬ」とする。第一に大衆の文化的水準の顕著なる向上と、大

衆的文化形態の生長に伴い、文学芸術の新しい発展は、国際的な影響をもっていること。第二に、他方資本主義的諸国においては、これまで「ブルジョアジーも進歩的思想に対して自由主義的に、民主主義的に寛大な態度をもって臨んで」来たが、その「最後の影も消え去ろうとして」今や文化的危機が叫ばれている。第三に「ソヴェート同盟における新しい技術的、精神的文化の発展」に対して、資本主義の不安は、「文化的インテリゲンチヤのプロレタリアートの側への転換の事実」を生んでいることなどをあげている。このような事実になつて、特に注意すべき事柄として二つの問題を提出している。その一つは、「労働者の生活意識の変化がなければならぬこと」つまり「革命運動は政治運動であると共に人間改造の作用」を行うものであること。その二つは、「プロレタリア大衆のうちに自然的に生長しつつある」文化の発展と共に「過去の文化的遺産の批判的摂取」ということを意識的努力すべきだ、とのべている。

以上は三木のトロツキイ批判の概略にすぎない。三木はその批判に当つて重ねて強調している点は、トロツキズムの非現実的性格であり、その非革命的理論構成である。当時のプロレタリア文学運動内部では殆んど影響を失つていたとはいへ、一部文学者の中のプロレタリア文学批判者に理論的根拠を与えていたものである。「現代階級闘争の文学」が一般日本文学界や文学愛読者を対象に書かれたという側面からみるならば、トロツキズム批判はいかに日本のプロレタリア文学運動に関心を深め愛情をもって擁護していたかがわかると思う。

おわりに

三木の文学論について、私はその初期の基調となっている批判

精神といくつかの問題の一端を紹介してみた。

昭和文学の特色であった政治との結合の中に新しい芸術性を求めるという変革への努力は、その後もいくつかの曲折をたどりながら現代文学の本流的課題となつていく。三木の主張は、昭和十年代に入つて始めて戦争体制下のもとで窪川鶴次郎『現代文学論』（昭和十四年、中央公論社）において、創作方法の問題として理論的な発展をみるようになる。この問題は、昭和文学史をどのようにとらえるかという問題に関連して来ている。昭和十年代の文学を単に挫折の観点からのみとらえられて来た戦後の考え方をもはや打開しなければならぬ。例えばこの時代は文学運動の崩壊という現実にふまえないがらも文学創造のうえでは新たな発展が試みられた時代であった。

三木に則していえば、「現代階級闘争の文学」の発禁数カ月後に「学芸自由同盟」を結成し、中島健蔵によれば、その頃から三木は「實際政治に接近しはじめていた。政治的人間としては無器用きわる人間であったが、知識人を組織する力は大きかった」（昭和時代、岩波新書）といわれる時代が始まる。そしてその抵抗にいくつかの誤りがあったとはいへ、トロツキズム批判にみられるきびしい批判精神は失われなかったのである。

ここにちの一部の知識人をゆさぶっているトロツキズムの問題に對していかなる態度をとるべきかを考えるとき、三木の批判精神は新しく生きてわれわれに迫るものがある。

注・トロツキイ『文学と革命』は、大正十四年七月に茂林唯士の訳で改造社から出版された。いわゆる浪漫的極左主義とよばれる「福本イズム」流行の時期とかさなっている点は興味がある。